

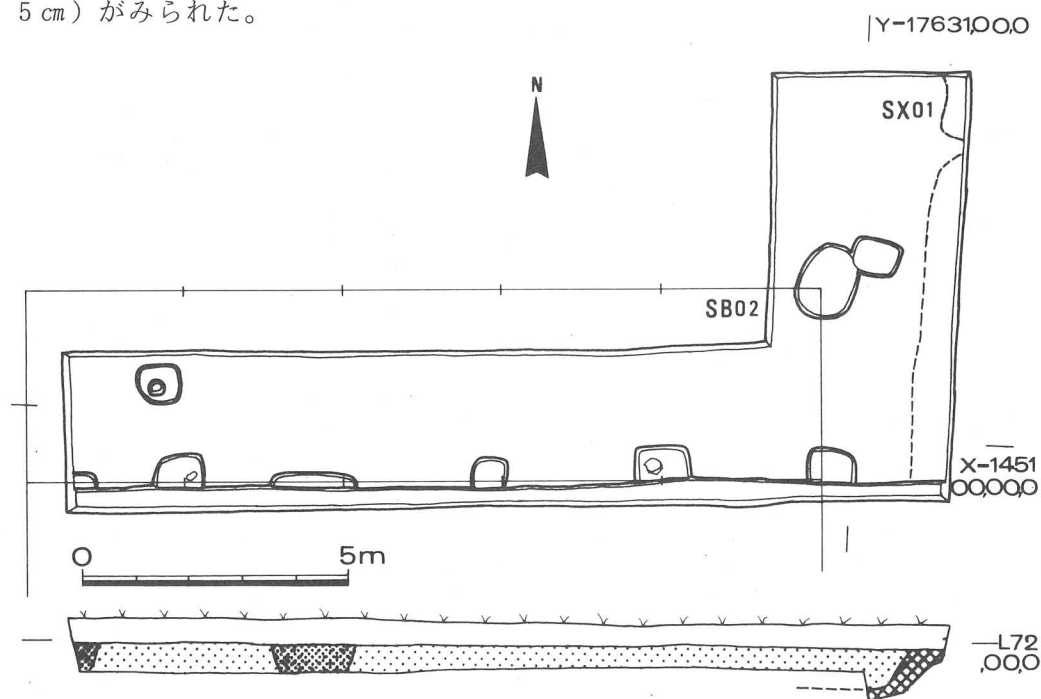
Ⅳ 平城京の調査

① 左京一条二坊十五坪の調査（第118－4次）

民家の新築に伴う事前調査である。遺跡はコナベ古墳と法華寺の中間にあたる平坦な丘陵上にあり、対象地域の中央に東西方向のトレンチ（ $18 \times 3 \text{ m}$ ）を設定して調査を行なった。

奈良時代の遺構として掘込み地業SX01・掘立柱建物SB02を検出した。遺構検出面は黄灰色粘質土の上面で、その下には同じく自然層の黄色粘土が厚く堆積する。奈良時代の遺構は全体に削平が著しい。

SX01は自然層を掘り込んだ地業である。東辺を約8mほど確認しただけで、掘形の全形は不明である。地業の深さは、検出面から約0.7m。地業内の埋土は下より1含礫褐白色粘質土、2含礫灰白色粘質土、3含礫黄褐色粘質土がほぼ水平に堆積する。トレンチ北部では掘形が屈曲し、底面に土器類を含む炭層（層厚約5cm）がみられた。



第8図 第118－4次発掘遺構平面・断面図

S B 02は、トレンチ南辺で礎石据付け掘形 6 ケ所を検出した。拡張区で掘形 1 ケ所をさらに検出したので、トレンチ南辺の柱穴は東西棟礎石 建物の、北の入側柱筋にあたるものと考えられる。平面形式 5 間× 4 間、桁行 10 尺等間、庇の出は 12～13 尺と推定。前記 S X 01はこの S B 02に伴う地業ともみられ、S B 02は基壇建物であった可能性がある。しかし、建物方位が平城京の造営方位とずれており、また調査面積が狭いので、復原に関しては今後の検討を要する。

遺物は S X 01の底面から須恵器（杯 A・B、皿、甕、平瓶）、土師器（杯 C、碗、甕）が出土した。いずれも平城宮土器編年のⅢ期にあたる。

② 左京三条一坊十五坪の調査（第 118－8 次）

調査地は左京三条一坊十五坪の西端で、東一坊大路の西側溝の存在が予測された。調査は東西 40 m、南北 24 m のトレンチを L 字形に設定しておこなった。

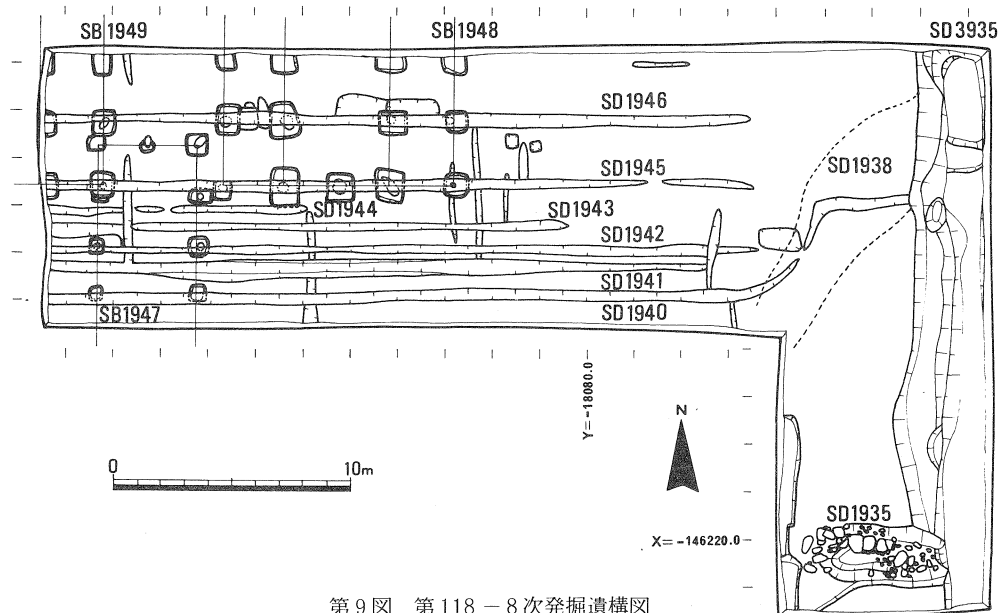
調査区の土層堆積状況は、水田面上に造成されていた盛土の下に水田耕土および床土があり、その下に遺物包含層である褐色砂質土が 20～40 cm の厚さに堆積していた。奈良時代の遺構はその下の地山面で検出した。

調査の結果、掘立柱建物 3・土壇 7・溝 12・旧河川 1 を検出した。S B 1948は桁行 3 間以上、梁行 4 間、東西庇付き南北棟で、調査区外に続く。柱間寸法は桁行 9 尺等間、梁行は身舎が 7.5 尺、庇が 9 尺である。S B 1949は調査区の西端に部分的に検出したにすぎないが、S B 9148と併存する。庇付きであろう。S D 1947は桁行 4 間以上、梁行 2 間の南北棟で、柱間寸法は 7 尺等間である。柱掘形の重複関係から、建物は S B 1947→S B 1948・1949の 2 時期に区分できる。S D 1940～1946およびそれらに交差する数本の溝はいずれも幅 30～50 cm、深さ 20 cm 前後の細溝で、埋土中には 8 世紀の土器片・瓦片を含む。うち S D 1940の埋土には焼土・鉾滓・凝灰岩切石片を含んでいた。S D 3935は東一坊大路の西側溝で、調査区内では推定される溝幅の約 3 分の 2（3～4 m）を検出した。溝埋土は上下 2 層に分かれ、上層は 9 世紀代の土器片がわずかに出土したが、土器の大部分は奈良時代末期（平城宮 V）に属し、長岡京時期（平城京 VI）のものをわずかに含む。

また調査区北端のやや深くなった溝底から18点の木簡が出土した。S D 1935はS D 3935に流入する石組みの東西溝である。この位置には坪内と大路とを限る築地の存在が想定されるので、S D 1935は築地下を潜る暗渠と思われる。なおこの暗渠は十五坪の中軸線上に位置している。S D 1938は平城京造営以前の自然流路である。

遺物には瓦・埴類・土器・木簡などがある。瓦・埴類は鬼瓦・軒瓦・丸瓦・平瓦・埴である。軒瓦はS D 1935・1941・1943・1946から出土し、軒丸瓦が13点、軒平瓦が37点ある。S D 1941からは鬼瓦1点と埴10数点が出土している。土器はS D 3935・1941から出土した多量の土師器、須恵器がある。S D 3935上層からは黒色土器が、S D 3935の西岸に部分的に堆積した砂層からは瓦器が、いずれも数点出土し、またS D 3935下層出土の多量の土器の中には2・3点の製塩土器片がみとめられた。木簡は18点ある。すべて破片あるいは削り屑で、「丹波国□上郡□」、「□丹波国 綾部□」、「雑腊」などの内容がみられる。

その他の遺物としてS D 3935下層から和同開珎の銅銭が1点出土している。同層からは木炭・桧皮・桃・栗・梅の種核の他、馬骨が1個体分埋土中に横たわった状態で出土した。



第9図 第118－8次発掘遺構図

③ 左京三条一坊八坪の調査（第118－22次）

調査地は、平城宮跡に南接する北新大池の池底部である。調査は、奈良市が北新池の東の堤上を通る市道の拡幅を計画し、その事前調査として実施した。調査地の状況と道路拡幅の工法から、調査の目的を二条大路の南北両側溝の位置を確認することにおいた。

二条大路の側溝と築地塀は、二条大路と東一坊大路の部分で一部を検出している（平城宮第32次調査）。また宮の西方では、西南隅地域の調査の際に、約10mの堀地をへだてた位置で宮の外堀、すなわち二条大路北側溝を確認している（平城宮第14次調査）。従って、この両側溝の西側延長線上に、南北に長いトレンチを2ヶ所に設定した。このトレンチは、漏水防止のため、堤に貼った粘土層をさけて設定したので不整形となっている。

A トレンチ 南北約12m、東西1mのトレンチを設け、大路の南側溝（S D 4006）を検出。溝幅は肩の部分で3.5m、底で2mを測る。溝内の堆積層は数層にわかれ、若干の木器片と多量の瓦片が落ちこんでいた。軒瓦は6711A型式の軒平瓦4点、軒丸瓦は6225L・6275D・6316C型式などがある。溝の南側は攪乱があり、そのためか築地塀の痕跡は見い出せなかった。

B トレンチ 大路の北側溝の推定位置に南北7mのトレンチを設けたが、溝としての何らの痕跡も見い出せなかった。そこで、側溝の位置が南北いずれかに振れている可能性を考え、それぞれの方向にトレンチを延長したが、側溝の痕跡を見い出すことはできなかった。

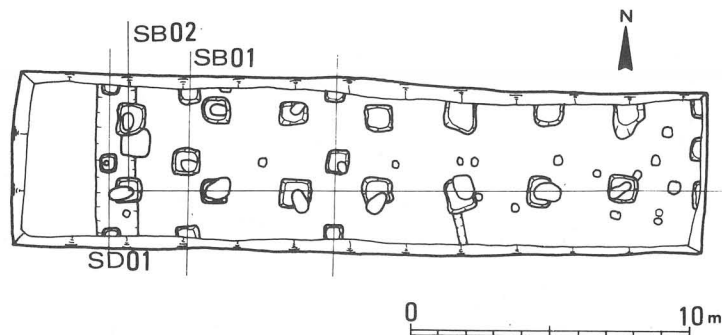
以上の調査成果をまとめると、二条大路の側溝は、南側溝（S D 4006）を推定位置に検出したが、北側溝（S D 1250）は推定位置に検出できなかったという結果になる。しかし、二条大路北側溝は宮の外堀を兼ねる重要な機能をもつものである。今回の調査は小規模なトレンチを設定しての調査であるので、早急な結論はさけねばならず、今後の調査をまちたい。

④ 左京三条二坊二坪の調査（第118～15次）

本調査は東鮓ファミリー・レストラン建設予定地の事前調査である。調査は東西25m、南北6mのトレンチを設定して進めた。

検出した遺構は東西棟建物1棟、南北棟建物1棟、南北溝1条である。東西棟建物（SB02）は底の部分の柱穴2列を検出し、7間分を確認した。身舎が調査区の南北いずれに位置するかは不明である。しかし、南側柱が南に抜き取られた痕跡を示すことから、身舎は検出した底の北側に想定することが可能である。桁行・梁行ともに柱間10尺で、柱掘形は約1m四方ある。7間あるいはそれ以上の大規模な東西棟建物である。なお、この建物には足場穴と考えられる小柱穴が伴う。南北棟建物（SB01）は2間分を検出し、西側に底をもつ。桁行・梁行ともに柱間9尺で、柱掘形は約70cm四方ある。南北棟建物（SB01）と東西棟建物（SB02）は柱穴の切り合い関係はないが、土層の観察から南北棟建物が一層上から切りこんでおり、東西棟建物が古い。南北溝SD01（幅1.5m深さ0.1m）は坪の東西約東3分線上にあたる。この溝の埋土は東西棟、南北棟建物のいずれの柱穴も覆っていることから検出遺構中最も新しい。東西棟（SB02）→南北棟（SB01）→南北溝（SD01）の順に3期の変遷が考えられる。なお、遺物は土器片・瓦片が若干出土したのみである。

検出遺構は二坪のほぼ南北2分線、東西は東3分線上に位置し、大規模な東西棟建物を配している。隣接する六坪の庭園遺構や七坪の建物群を考え合わせると、この坪も大きく宅地割りした高級住宅地だったことが類推できよう。



第10図 第118～15次発掘遺構図

⑤ 左京三条二坊七坪の調査（第118次-23次）

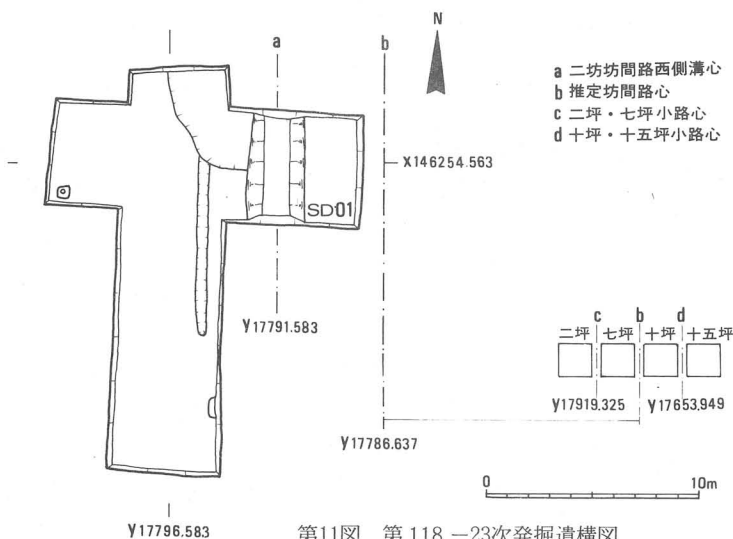
本調査はマンション建設に伴う事前調査である。調査は南北トレンチ（ 18×5 m）と東西トレンチ（ 14×5 m）を設定して進めた。当該地は左京三条二坊七坪東南隅にあたり、一部二坊坊間路にかかる地点である。

遺構は二坊坊間路西側溝・柱穴1・土壇1である。坊間路西側溝（SD01）は幅約2.5 m、深さ0.9 m、堆積土は大きく2層に分れる。上層は黒色粘土層、下層は灰色砂質土で、遺物は主として上層から出土した。

出土遺物には多量の木製品・木簡・土器・瓦などがある。木製品は木刀1点・儀仗用の弓4点・人形1点・削り掛け14点・曲物・木蓋などのほか多数の加工材が出土した。木簡は上層から18点、下層から1点出土した。上層出土の「手枕里戸主无得津君千嶋一石」の付札木簡が完形品のほか、他は断片である。土器は平城宮Ⅰ・Ⅱ期（8C前半）の土師器・須恵器が主体で、「主水司」「□造少乃古」と記した墨書土器も出土した。瓦類は軒丸瓦1点のみである。

今回は二坊坊間路の西側溝の検出にとどまったが、83・86次調査、112-3次調査の成果から坊間路の幅員を推定できる。すなわち、二坊坊間路をはさむ両側の南北小路心（c・d）が判明していることから、坊間路推定心(b)を求めることができる。この推定心から西側溝心(a)の距離は約4.9 mとなり、その倍数約9.8

mが幅員となる。従来坊間路は大路規模に推定されているが、今回の二坊坊間路幅員は3丈強となり、小路(2丈)の幅員に近い。二坊坊間路の幅員については今後の調査の進展をまって検討しなければならない課題であろう。



第118図 第118-23次発掘遺構図

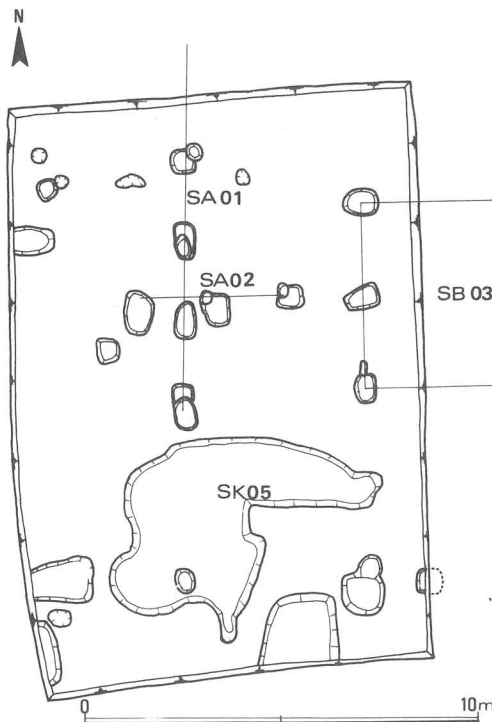
⑥ 左京六条一坊十坪の調査（第118－16次）

今回の調査は、まると工業株式会社の資材置場建設に伴う事前調査として実施した。調査は、予定地の一画を東西10.5m、南北15mの範囲で行った。検出した遺構は、古墳時代の土坑2、奈良時代の掘立柱建物1、掘立柱塀などである。

奈良時代の遺構 a・bの2期に分れる。a期には南北塀SA01と建物SB03がある。SA01は、発掘区のほぼ中央で4間分を検出。柱間は2.1m（7尺）等間。主軸方位は北で東に約1度振れる。SB03は東西棟建物の西妻部分。柱間は2.4m（8尺）間である。b期には東西塀SA02がある。2間の塀で、柱間は2.1m（7尺）間、柱は抜き取っている。

古墳時代の遺構 不整形土坑SK04・05がこの時期の遺構である。一部を調査したのに留まったが、内部から布留式の壺の破片が出土した。

まとめ 調査地点は十坪の東西の中心に近いところであるが、発掘面積が小さく、検出遺構が坪内部でいかなる位置をしめるのか不詳である。このうち、南北



第12図 第118－16次発掘遺構図

塀SA01は10坪内部を東西に区画する施設の可能性があるので検討しておこう。平城京の条坊の調査は、六条付近ではあまり進行していない。そこで、岸俊男氏が、現存地割から想定した各坊の規模（岸俊男『遺存地割・地名による平城京の復原調査』1974）をもとに、先年調査した朱雀大路の位置を基準に割りつけた。この手続きによって得られた十坪の想定の東西中軸線は、SA01の位置から西約13mの位置にあたる。

⑦ 羅城門跡の調査（第118－26次）

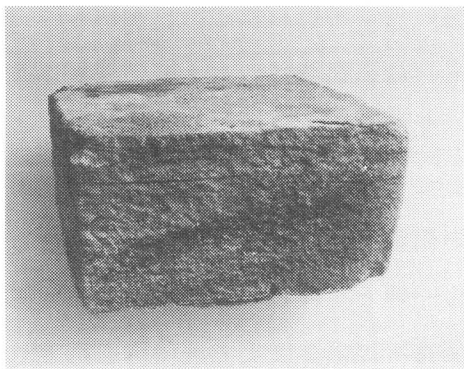
佐保川災害復旧工事の一環として、大和郡山市所在の来生橋北側の西堤防に工事が及ぶこととなった。この地点は平城京羅城門跡にあたり、昭和44年から47年にかけての3次にわたる発掘調査によって堤防の西斜面以西において羅城門の基壇西端部が検出されていた。また、昭和10年岸熊吉によって、来生橋南北の所々において4個の礎石が落ち込んでいることが確認されていた。

建設省近畿地方建設局大和工事事務所・奈良県教育委員会および奈良国立文化財研究所の3者は協議のうえ事前に発掘調査を実施することとし、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が調査を担当した。

西堤防東斜面下半部延長約35mとそれに対応する川底を川幅の約 $\frac{1}{3}$ にわたって発掘することとし、工事のための矢板堰を調査に援用、水をくみあげて川底の調査の準備をおこなう一方、昭和55年1月18日、斜面の調査を開始した。斜面中ほどに幅1m内外の平坦面があり、この位置がかつて検出した門基壇上面のレベルとほぼ等しいことから、この平坦面の上部1mを含め以下を川底にむかって掘り始めた。表土を除去したところ、全体に玉石練石張りが現われ、検討の結果、これは昭和10年頃の河川改修工事によるものとの事実が判明した。再び協議の結果、この部分の調査は実施しないことにした。

川底の調査では、遺構の残存は認められず、調査区内に存在が予想された3個の礎石のうち1個だけを検出することができた。この1個は川底の砂の中に埋まり、1角のみを水中に現わしていた。1月30日、重機によりこの礎石を取りあげ、調査を終了した。

後日の調査によると、この礎石は岸氏撮影のうちの1個にあたり（大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972 fig 1の左写真）、溶結凝灰岩製、長辺118cm、短辺100cm、厚67cmを測る。



第13図 羅城門礎石

⑧ 右京一条二坊西一坊大路の調査 2 (第 118 - 29 次)

奈良市二条町 1 丁目地内での駐車場造成にともなう事前調査である。調査地は平城京右京一条二坊一坪・二坪に該当し、西一坊大路西側溝および一坪と二坪との坪境い小路の検出が予想された。

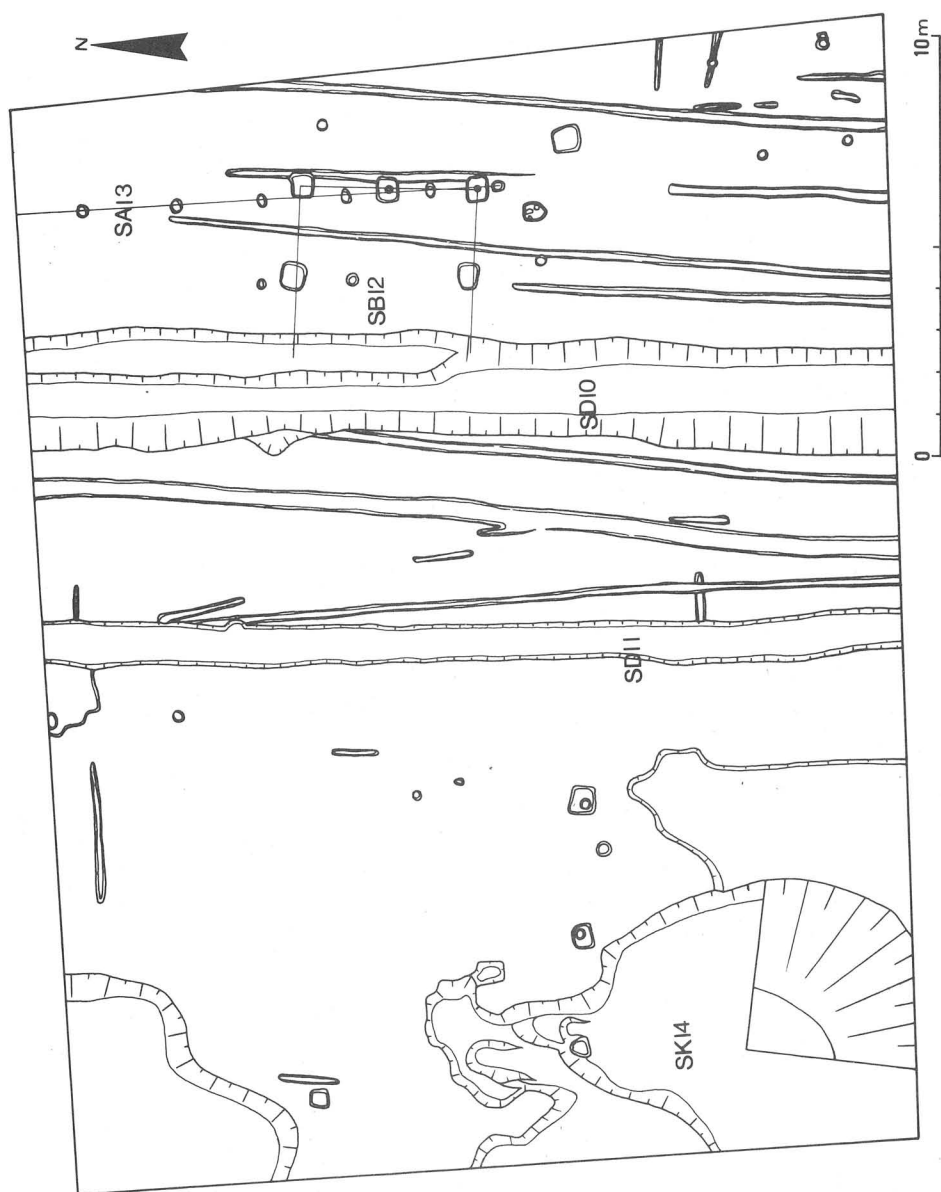
調査は南地区と北地区とに分けて行なった。南調査区では水田耕土・床土の下に近世遺物を若干含む 2 ～ 3 層の粘質土が堆積し、現地表から 0.5 m で遺構面に達した。遺構検出は暗茶褐色粘質土面で行なった。検出した遺構は掘立柱建物 (S B 12) ・堀 (S A 13) ・土壇 (S K 14) および多数の溝である。

検出した溝のうち細い斜行溝は中世以降の耕作にともなうものであるが、S D 10 と S D 11 とは南北に走り、溝内には古墳時代の土器や奈良時代の瓦・土器を多く含むので、奈良時代の溝であると判断できる。S D 10 は幅 2.3 m ～ 3.0 m、深さ 0.6 m の溝である。調査区の北半部では溝の東肩は二段になる。これは第 103 - 104 次調査で検出し西一坊大路西側溝と考えた溝の北延長上に位置する。溝幅は今回検出した部分がやや広がっているが、やはり西一坊大路側溝と考えられよう。とすれば、大路幅は溝心々で 8 丈となる。S D 11 は幅 0.9 ～ 1.1 m、深さ 0.2 m で、S D 10 の西 6 m (溝心々距離 2 丈) の位置にある。S D 10 と S D 11 との間は黄色粘土を積んでおり、これを築地の痕跡とするならば、S D 11 は垣の内側の雨落溝に推定できる。S B 12 は西一坊大路路面上にあり、西端は大路西側溝にかかり 2 × 2 間に推定できる。柱の根固めに瓦を用いており、西一坊大路廃絶後の建物と思われる。S A 13 も西一坊大路路面上にありやや西にふれている。S K 14 は奈良時代の大土壇で深さ 1.5 m である。

北調査区は、地表から 0.6 m で遺構面に達し、層位は南調査区と同様である。ここでは縦横に細い溝が走るが、出土遺物が少なく、重複関係からも坪境い小路の側溝は確定できなかった。ただし、S D 15 は第 103 - 7 次調査で右京一条二坊の一坪と二坪との坪境い小路の北側溝に推定された溝の真東延長上に当たる。同調査では幅員 2 丈で南側溝を推定したが、今回はその延長上に溝は検出できなかった。今後の調査をまたねばならない。

⑨ 右京一条二坊西一坊大路の調査 2 (第 118 - 31 次)

奈良国立文化財研究所新庁舎排水溝にかかわる公共下水道工事に伴う事前調査である。奈良市二条町 2 丁目に改修される同研究所庁舎の東側は平城京西一坊大路に相当し、第 103 - 14 次調査によってその東西両側溝を含め大路の位置は確認済みであった。そこで下水管埋設に際しては、大路側溝をさけるべく路面敷部分を調査した。検出遺構は西一坊大路路面と近世の溝数本および土壇 1 である。



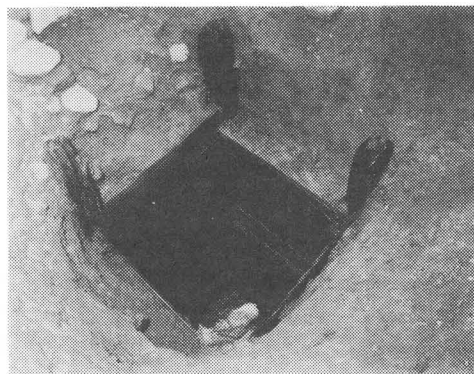
第14図 第118 - 29次発掘遺構図

⑩ 右京五条二坊五坪の調査（第118－1次）

調査地は唐招提寺の南方約100mの地点で、平城京右京五条二坊五坪の北辺にあたる。当初、今回の調査区北辺に五坪と六坪の坪境小路を想定していたが、調査の結果調査区全体が北側に流れる大納言川の氾濫による攪乱を受けており、坪境小路を検出することができなかった。

検出した主要な遺構は井戸1基、幅の狭い旧流路跡1条である。

調査地の土層は、耕作土・床土の下に厚さ約20cmにわたって灰白色及び黒色砂層が何層も堆積しており、調査全体が大納言川の氾濫原であったことを示す。調査区の中央やや南よりで検出した東西に帯状にのびる旧流路は広い部分で幅2m、最深0.8mで、流れによるえぐりも随所に見うけられた。調査区の南辺では、旧流路に隣接して木組みの井戸1基を検出した。この井戸は流路の廃絶後に設けられたものである。井戸の東側には部分的に径15cm内外の石が階段状につまれてお



第15図 第118－1次検出井戸

り、洗い場としての施設と考えられた。井戸枠は内のが約90cmで、四隅の角柱にみぞを掘りこみ、これに横板を上から落してむ。横板の幅はいずれも一定せず、また各辺は12～13枚ある。深さ約3.5mである。なお井戸の埋土からは平安時代の須恵器・羽釜・皿・瓦片等が出土した。

⑪ 右京五条二坊十四坪の調査（第118－12次）

唐招提寺の南西、右京五条二坊十四坪及び五条々間大路南側溝の推定位置で、家屋の改築にともなう事前調査をおこなった。調査は南北トレンチ(12×2m)を設定して進めた。土層は、耕土・床土下に中・近世の遺物包含層である暗褐色砂質土(約30cm)があり、その下で灰白シルトないし淡褐色砂の地山となる。

主要な遺構は掘立柱建物1(SB01)、溝2(SD02・03)で、他に土壇がある。

SB01は南北2間(8尺等間)を検出したにすぎず、南北棟か東西棟か明らか

でない。柱掘形は一辺約 1.0 m であるが、深さ 0.2 m とかなり削平されている。S D 02は東西溝で、北肩が発掘区外になる。幅 3.0 m 以上、深さ約 0.8 m。埋土は 2 層あり、ともに中・近世の遺物を含む。S D 03は S D 02に注ぐ南北溝で、中・近世の遺物が出土している。

土壇は中・近世のもので、この中には瓦・石をすえて礎板としているものもあるが、建物にはまとまらない。

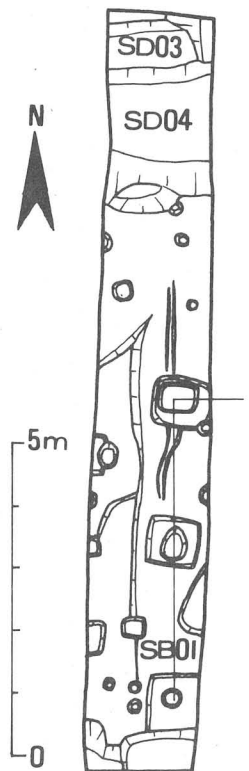
遺物には中・近世の瓦器・灯明皿・瓦類がありこのほかに少量の奈良時代の土器・瓦が出土した。

昭和51年度に唐招提寺東南でおこなった第98-14次調査において、五条々間大路北側溝を検出している。北側溝は近世まで改修されながら存続したと考えた。今回検出した東西溝 S D 02は、北側溝と心々で約12m（4丈）南に位置する。S D 02は北側溝と同様に近世に至るまで改修・存続した五条々間大路南側溝と考えていいであろう。S B 02は柱筋が平城京の造宮方位にほぼあい、右京五条二坊十四坪内の建物群の一部になると考えられる。

⑫ 右京七条一坊十五坪の調査（第118-5次）

薬師寺の東南約 300 m、県道木津郡山線の東際での、店舗新築工事に伴う事前調査である。調査は東西トレンチを 2 ケ所（14×4 m、3.5×2 m）設定して進めた。土層は、耕作土・床土の下に褐色の砂質土が約60cm堆積し、その直下に黄灰色粘質土がある。遺構検出はこの上面で行なった。

検出した主要な遺構は掘立柱南北棟建物 1 棟と西一坊大路東側溝である。掘立柱建物は梁行 2 間（7 尺等間）で、桁行は西側で 1 間分（7 尺）検出したのみである。一坊大路東側溝は東の肩部を検出したにとどまったためその幅、深さともに明らかでない。



第16図 第118-12次
発掘遺構図

⑬ 称徳天皇御山荘推定地の調査（第118－2次・20次）

調査地は奈良市西大寺町の市立伏見中学校の北側に残る海拔高87～94mほどの丘陵裾部にあたる。隣接する池は長辺60m短辺20mで中島を有している。西大寺蔵の伽藍絵図にはこの付近は称徳天皇御山荘とされ同様な池が描かれていることから、その有力な推定地とされている。また平城京北辺四坊の三坪・六坪にわたり、坪境小路等の存在も予想された。池の東・南側で相継いで4件の宅地造成あるいは住宅新築の現状変更申請が提出され、昭和54年4月と11月の2回に分けて延べ5本のトレンチを設けて99㎡を発掘調査した。

遺構 池の東側は現在農道によってせき止められ、この農道の東側でA・Bトレンチを設けた。Aトレンチでは、現地表下約1.3mの地山面で南北に走る池岸を検出した。池の深さは約20cm。池中には底に厚さ約5cmの砂礫層があり、その上に厚さ約15cmの茶色をした植物腐植層が堆積していた。池岸には人工的な護岸は設けられておらず、緩斜面となっている。Bトレンチではやはり植物腐植層が全体に及んでおり、トレンチ全体が池の中にあたることが判明した。

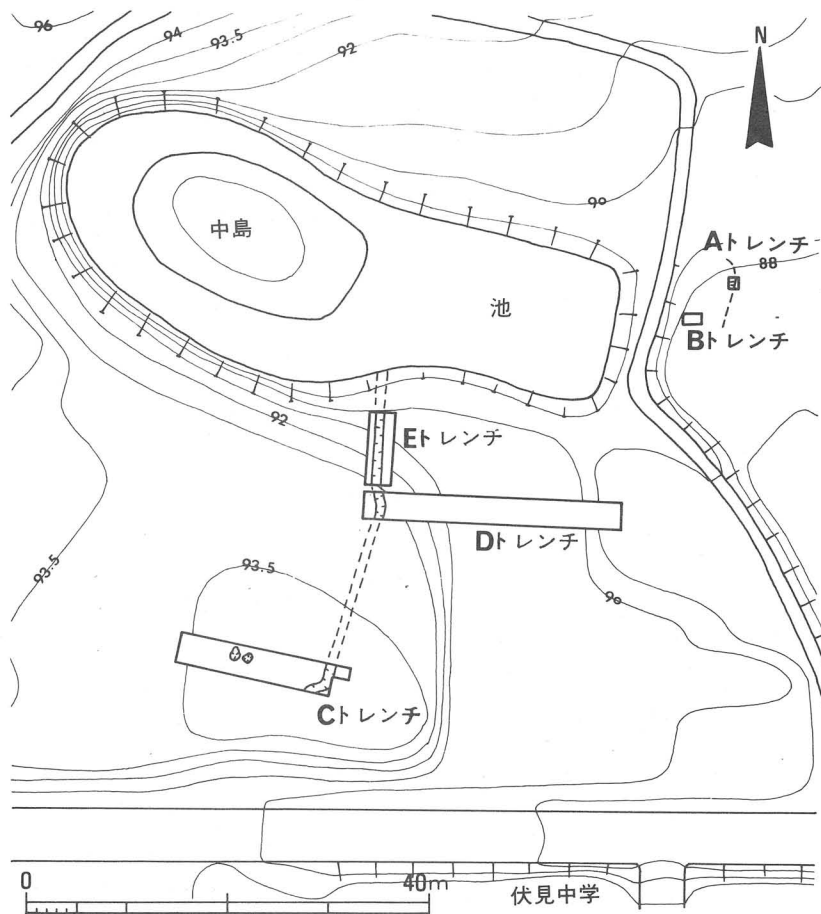
池の南側は南西から北東へ下る斜面となっている。C・D・Eトレンチでは一連の南北溝一条のほかに土壇二基を検出した。溝は素掘りで、やや屈曲しながら南から北へ向って池に流れ込む。幅は最大1.7m、深さ40cmほどである。Cトレンチでは地表下30cmほどで地山面となり溝を検出したが、D・Eトレンチでは地表下約1.0mで地山面となり、この上の黄灰褐砂質土層上面で溝を検出した。

遺物 Aトレンチでは、池の東岸の地山直上で須恵器円面硯1点、池内堆積層で土師器甕1点が出土した。円面硯は陸部の周囲に低い小突帯を巡らせ、海部と区画したもので、脚には長方形の透しがある。奈良時代後半に属するものである。甕は体部の小破片で内外をハケメによって調整したもので、奈良時代前半の可能性が高い。他のトレンチでは、池内堆積土や溝埋土中から少量の中世土師器片が出土している。また、奈良時代の平瓦平と埴輪片各1点が出土した。

まとめ A・Bトレンチでは池およびその東岸を確認し、池が現在より約10m東に広がっていたことが判明した。また出土遺物からみて少なくとも奈良時代に

は池がすでに存在していたことが明らかとなった。池岸には人工的な護岸を施しておらず、地山面を浅く掘り込んだものであった。したがって池は仮に人工的に造られたものとしても、旧地形を利用して簡単に手を加えた程度であったと考えられる。池の南岸は現在も侵蝕が進んでおり岸が当初より広がっているものと思われた。南側で検出した南北溝は遺物からみて中世の一時期に存在したものであり、古代の遺構は検出できなかった。

以上のように池が奈良時代から存続していることを確認する大きな成果を得たが、これに関連する施設の確認はできず、称徳天皇御山荘との積極的な関連を見出すには至らなかった。なお今後の調査が待たれる。



第17図 第118-2・20次発掘遺構図